

キャラクター名

プレイヤー名

八意思兼（やごころおもいかね）

シンドローム	ブラム＝ストーカー		ワークス	レネゲイドビーイングD	カヴァー	
	グレイブニル					
オプション			年齢	古い	性別	ー
覚醒	生誕	衝動	妄想		初期侵食率	31%
出自		経験			邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	44
肉体	2	0	0		6	8	行動値	24
感覚	2	0	0		6	8	(非装備時)	24
精神	3	0	0		5	8	戦闘移動	29
社会	1	1	0		6	8	全力移動	58

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	1		交渉	1	
回避	1		知覚			意志	1		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
衆長エンブレム『血餐：一般』		ロイス			
サングイン					
		ロイス			
		最大財産P: 16			
		残り財産P:			

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
不死者の血	★	ー	常時	至近	自身	自動	ー	
効果：ブラムのEFによってHPを失わない								
ヒューマンズネイバー	1	ー	常時	至近	自身	自動	RB	
効果：衝動判定D+Lv個								
オリジン：ミネラル	1	2	マイナー	至近	自身	自動	RB	
効果：シーン間、装甲値+[Lv×2]								
ヴァイタルアップ	1	参照	セットアップ°	至近	自身	自動	ー	
効果：HP+[現在の侵蝕率-100]/侵蝕率は加算したHP分上昇する								
鮮血の奏者	3	4	セットアップ°	視界	単体	自動	ー	
効果：R間、攻撃力+[消費したHP×3]								
血染めの庭園	3	7	セットアップ°	至近	自身	自動	ビ°17	
効果：R間、全IファクトLv+2/Lv上限超える								
赫き剣	3	3	マイナー	至近	自身	自動	ー	
効果：攻撃力+[Lv×3+7]の武器を作成								
赫き重刃	5	5	マイナー	至近	自身	自動	ー	
効果：武器攻撃力+[消費したHP×4]								
聖なる血槍	6	4	マイナー	至近	参照	自動	120%妄想	
効果：[Lv×5]点以下のHPを消費し、シーン間、指定した武器の攻撃力かがガード値に+する。								
サングイン	★	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
効果：消費したHP+5/任意のHPを消費するEF使用時								
赤色の従者	5	5	Xジャー	至近	自身	自動	ー	
効果：HP[Lv×5+10]の従者生成。本体のあらゆる判定D-3個								
声なき者ども	3	ー	常時	至近	自身	自動	ー	
効果：シーンで作れる従者の数をLv体増加させる。								
知恵あるもの	1	ー	常時	至近	自身	自動	ー	
効果：武器持てるしアイテム使える								

永い時を生きてきた古い半妖。

人と半妖の争いや衆間の争いには基本的に関わるつもりはなかったが、子供たちがいなくなり、まあ一人は暇というもの。「旧友も渦中にいることぞすし…ね」

積み重なる死体、血の海の地獄から這い出るように生まれた。血を喰らい獣のように、永く永く個としての自我は希薄に孤独に生きていた。そうして時代が2つか3つかは変わる頃に、血溜まりに落ちていた赤子を食わずに拾ってしまった。そのほんの少しの気まぐれが孤独に別れを告げる転機だった。

拾った赤子が育つと同じように己も自我を確立していった。その中で人間らしい感情や他者とのかわわり方、果てには他者愛するという機能を獲得していく。それは仏の持つ慈愛、親から子に対する無償の愛に近いものだった。それからは身寄りのない者たちを拾い育て、共に過ごし、庇護することが喜びであり楽しみになっていく。

しばらくすると周りには行き場のない者たちが集まり、庇護を請う者の懇願、折り、願いが詢い交ぜになり、継ぎ接ぎの信仰が生まれていった。それは宗教と呼ぶにはあまりにも歪なものだったが、請われるまま、皆の望みに応えるよう振る舞っていった。そうして名前も持たなかった獣は『八意思兼』と呼ばれ祀られるに至った。

自身の為に建てられた西の郊外の寺で、今の時まで、拾い、育て、見守ってきた。人間も半妖も分け隔てなく惜しみない愛を注いだ。ある子はどこかの半妖衆へと所属したし、ある子は検非違使に、またある子は芸事を極めんと旅へと出た。

[illegible]